詩枕名寄

上

静嘉堂文庫本

福田秀一
杉山重行
千艘秋男
編

古典文庫

福田秀一
杉山重行
十艘秋男
編

詩格名寄

上

静嘉堂文庫本

古典文庫

古典文庫第五九七冊

平成八年八月二十日印刷発行　　非売品

上　寄名枕詞

静嘉堂文庫本

編　者　福田秀一
　　杉山重行
　　千艘秋男

発行者　吉田幸一

印刷者　共立印刷株式会社

製本者　(有)武蔵製本

発行所　114　東京都北区西ヶ原三ノ三四ノ一二
電話〇三(三九一〇)二七一七
振替口座〇〇一九〇—九—一四五九七番
古典文庫

© KOTEN BUNKO 1996. Printed in Japan

目次

凡例……三
謌枕名寄卷第一……九
謌枕名寄卷第二……四六
謌枕名寄卷第三……一〇一
謌枕名寄卷第四……一六二
謌枕名寄卷第五……二一四
謌枕名寄卷第九……二六一
謌枕名寄卷第十一……三一五
謌枕名寄卷第十二……三六三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

凡例

一、静嘉堂文庫蔵「歌枕名寄」（函架番号一〇五－六）は、全三八巻のうち一六帖（内容としては一五巻と半端の二巻）を有するに過ぎないが、鎌倉末期か遅くも南北朝時代の書写と見られる古写本であり、諸本に比して歌の有無や配列更には左注等に相違が多く、「歌枕名寄」の成立と流伝を考えるには重要な資料であろうと思われるので、ここにその全文を翻刻することとした。

二、それに際して、本文庫にはすでに「歌枕名寄」の流布本（刊本）が収めてあり、それと対比しやすい形で翻刻するのが読者に便利と考えて、本文庫に収めることを吉田幸一博士に希望したところ、幸いに快諾されたので、本書が実現したのである。吉田博士の御厚意に深謝申し上げる。

三、翻刻に際しては、底本が古写本であることにかんがみて、努めてその形を忠実に伝えるべく、次のような処置をとった。

1、漢字の異体字・略字は、印刷事情の許す限り底本の字体に一致あるいは

近似するようにした。

ただ、底本の漢字は原則として行書あるいは草書であるが、印刷所の事情で旧字体の正字になっているものが少なくない。例えば、実・条・桜などはほとんどの場合この字体だが今回は正字としてあり、恵・徳・者・隆あるいは平・良・羽・朝・麻・兼・曽の類、それに辵部（シンニョウ）の文字なども常用字体に近い形、経・継・検・権・顕・将・摂・頼などは所詮草書ながらどちらかと言えば常用字体と見られる形であるが、これらも今回はほとんど正字になっている。

2、宛字・誤字・脱字や仮名遣・送仮名・踊り字等もすべて底本のままとし、また傍書・補入・頭書の他、歌句の字間を含めて文字・記号の位置も、できるだけ底本のままとした。但し歌句や左注の字間には、細かい差はつけなかった。また、誤読・誤植と疑われそうな箇所には、原則として右傍に小さく（ママ）と注した。

3、虫損・汚損等で判読しにくいものを推定した文字は、角括弧に入れて示

した。

4、振仮名や返点も底本の通りとした。

5、文字の大きさも、特にその相対的な大小を、できるだけ底本に一致するようにした。

四、しかしながら、印刷の都合上、次のような点で底本とは相違している。

1、平仮名の変体仮名は、通行の平仮名に改めた。

2、漢字の異体字は、正字もしくは通行の字体に改めたものも少なくない。そのすべては到底示し得ないが、特に顕著なものをいくつかを挙げれば、古写本によく見る異・畢の異体字（「己」の下に「大」または「十」）、部の偏を略して片仮名のアに近く書いたもの、菩薩・菩提の各略号、第・等の略字（各四画）などで、これらはすべての出現箇所でそうなっている。限定した箇所に見られる地名（歌枕名）の文字では、櫃を木偏に貴のみを書いたり、瓜に草冠を加えたものなどもある。

3、巻一～九の目次・本文における歌枕名の上の∴、∴、・の記号は底本

では朱であるが、今は一々注しなかった。

4、各歌の作者名の位置は、底本ではそれが一行の場合は上下句のほぼ中間の下方に、二行の場合は一行目が上下句の中間の下方、二行目がそれに接近して下句のほぼ真下に記されているが、今回は本文に見るような位置に翻刻した。

5、重ね書きで下（当初）の文字が判読できる場合は、初めにその文字を括弧に入れて記し、続けて上の（後から書いた）文字を記した。なお、二五〇の肩注「拾八」は抹消してある。

五、歌頭に通し番号を付した。その方式は既刊の本文庫本に準ずるが、左注の中の歌は、全形（五句具備）で見えるものに限り、その行の上方に（〇〇〇左）という風に記した。

六、また、作者名（欠くときはその該当位置）の下に、その歌の流布本（既刊の本文庫本もしくは新編国歌大観本、後者は仮名遣を改めてある）の歌番号を、括弧に入れて記した。なお、その括弧を角括弧［　］としたのは、その

歌が、巻は同じながら歌枕名の異なる箇所に見えるもの、〈　〉に入れたのは、その歌枕が他の巻に挙げられているものである。

七、この翻刻は、福田が思い立って礎稿を作成し、それを杉山・千艘の両名が点検したものである。索引も既刊の本文庫本に倣ったが、作成の手順は同じである。校正は、底本の写真（本文）と原稿（凡例・索引）とによって、三名で行った。

一九九六年二月

福田秀一
杉山重行
千艘秋男

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

「謌枕名寄卷第一」

「畿内部一　山城國一」

「この間欠」

一　「上句欠」わさたのをしね　いまやからまし　（一六三）

二　さりともとたのみをかくるゆふたすき
　わかかたをかの　神とおもへは　賀茂政平　（一六九）
　右一首哥　片岡の祝にて侍けるを同社の
　祢宜にわたらむと　申　けるころよめると
　なん

三　新六帖　かけをのみ　ひさしきよゝりたのむかな
　松　わかかたをかの　松のひとむら　正三位知家　（一六五）

四　秋かけて　かみのしくれや　ふりぬらん
　紅葉　わかかたをかの　もみちしにける　實方朝臣　（一六三）「一〇オ

五 新六帖 かたをかの　こかくれすくる　みたらしの
河をとすゝし　ゆふやみのそら　正三位知家　（一六四）

并二
・多田須宮　正字可詳

六 新古十三 いつはりを　たゝすの宮のゆふたすき
かけつゝちかへ　われをおもはゝ　平貞文　（一七〇）

七 同九 君をいのる　心のいろを　人とはゝ
たゝすの宮の　あけの玉かき　前大僧正慈鎮　（一七四）

并三
・一言神

」一〇ウ

八 きみをいのる　たゝひとことの神の宮
ふたこゝろなき　ほとをしるらむ　賀茂氏久　（一七七）

∴山階篇

・山

九 拾五 やましなの　山のいはねに　松をうへて

岩根松 ときわかきはに　いのりつるかな　　平兼盛　（一九三）

右哥詞書云天暦帝四十の御とし

山階寺金泥の壽命經四十卷を彼寺に

書供養して御卷數をそへてたてまつらせ

給けるに　洲をつくりて鶴をたて、　」二オ

御卷數をくはせたり洲の臺の敷

物にあしにてあまたのうたかきける

中にとなん

・里

後拾十九 一〇 かへるさを　まちこゝろみよ　かくなから

よもたゝにては　山しなのさと　　和泉式部　（一九四）

右哥詞書云石山にまいり侍けるにみち

に山しなといふ所にてやすみ　侍けるに
家あるしの心あるさまに見[え]侍けれは
いまかへりさまになといひ侍けるをよに
さしも　なといひ侍けれはよめるとなん

└二ウ

・宮

二 後廿 はかなくて　よをふるよりは山しなの
宮のくちきと　ならましものを

三條右大臣　（一九五）

三 山しなの　宮のくちきと君ならは
われはしつくにぬるはかりなり

藤ノ兼輔朝臣（一九六）

右二首先帝おはしまさてのちよの中
思なけきけるころ贈答哥と見えたり

└三オ

・木幡 并一

山

一三　万二拾九小科（ウツ）　強田
やましなのこはたの山に　むまはあれと
かちよりそくる　君をおもひかね
歩　吾來（ワレクル）　念不得

柿本人丸　（一九八）

一四　青旗（アヲハタ）の　木旗（コハタ）の上を　かよふとは
めには見れとも　たゝにあはぬかも

（一九七）

右近江天皇　聖躰　不豫之時奉獻御哥

一五　新六帖　こはた山　あるはさなからくちなしの
やとかるとても　こたへやはせむ

正三位知家　（一九九）

」三ウ

峯

九條内大臣　十五首

一六　宇治滋　ゆきふかき　こはたのみねを　なかめても
詠合　うちのわたりに　人やまつらむ

小宰相　（二〇一）

河

拾十二

一七　こはた川　こはたかいひし　ことのはそ
なきなすゝかむ　たきつせもなし

讀人不知　（二〇三）

一八 よそに見て　ふしみもしらぬこはた川

伏見詠合 こはたかゆへに　ぬるゝたもとそ　（二〇四）」一三オ

一九 寶治百、こまとめて　うちよりわたる（ママ）　こはた川

おもひあまると　うきなゝかすな　前大納言爲家（ナシ）

同

里

二〇 拾十九 やましなの　こはたのさとに　むまはあれと

かちよりそくる　君をおもへは　人丸　（二〇五）

二一 千十八 わかこまを　しはしとかるか　山しろの

こはたのさとに　ありとこたへよ　俊頼朝臣　（二〇六）

右哥かるかやをかくしてよめるなり

三 建保名所百、とをからぬ　ふしみの山の　せきもりは

こはたのさとに　きみそすゑける　従二位家隆　［二〇二］」一三ウ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb